

The Book of Tea に見るゲーテ
—*Ulysses* 第9挿話の「発見の入り口」から—

Goethe in *The Book of Tea*
—From the “portals of discovery” in *Ulysses*—

東郷 登志子
Toshiko TOGO

Keywords : Goethe, rewriting, awe, art, religion

キーワード : ゲーテ、書き換え、畏敬、芸術、宗教

Summary

The Book of Tea (1906), a practical literature on the theory of Japanese art and culture, written by Okakura Kakuzo (1863–1913) has some allusions to Goethe’s *Wilhelm Meisters Lehrjahre* (1795–96) and *Wilhelm Meisters Wanderjahre* (1829). Though there has been no precedent for such comment, intensive reading of James Joyce’s *Ulysses* (1922) has led us to find Okakura’s artistic devices suggest Goethe scattered here and there in his work. From the intertextual perspective, this paper attempts to show that episode 9 of *Ulysses* illuminated the “portals of discovery” of how Okakura adapted Goethe parallel to the Japanese cultural context in his literature. In order to attain the goal of this paper, first we review the historical background of the publication of *The Book of Tea*. Second, it is shown that the strange description at the beginning of *Ulysses* episode 9 is a Joycean paradoxical comical way of twisted unification of Okakura’s serious Japanese art theories and dramatic descriptions of the last chapter of his book. Third, the adaptations of Goethe’s original are exemplified parallel to the context of *The Book of Tea*. Ultimately, Goethe was given a new birth in the context of modern Japan, as homage to a leading figure who had anticipated the arrival of world literature, which Okakura had earnestly longed for.

はじめに

岡倉覚三(1863-1913)の英文著書 *The Book of Tea* (1906) は日本文化のハイブリッドな特性を具現した芸術論であるが、和漢の書物の引喩を織り込んだテキストの背後に、西洋文化や文学の引喩を重ねた文学作品として読むこともできる。というのも、作中に埋め込まれた西洋文学には、ホメロス、シェエラザード、メーテルリンク、シェイクスピア、英国ロマン派の詩人たちのほか、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe 1749-1832) の『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』 (*Wilhelm Meisters Lehrjahre* 1795) の引喩も散見されるからである。しかし、これまでその事実を指摘した先行研究はない。そのため、本稿は、新批評の観点を踏まえ、*The Book of Tea* において書き換えられた、ゲーテの引喩と考えられる類似表現に着目し、その意義を考察したい。

なお、*The Book of Tea* は Fox & Duffield 社の初版本 (1906年) を用い、桶谷秀昭訳『茶の本』 (講談社1994年) を参照した拙訳を用いる。なお、*The Book of Tea* が構造に聖書を援用していることと、岡倉自身の呼称から『茶書』という訳語を用いる。引用は BT と略記し、聖書の引用方法に倣い、章と節の数字で記す。例えば (BT III. 2) は、『茶書』第三章第2節を指す。*Wilhelm Meisters Lehrjahre* は WML 又は *Lehrjahre* と略記し、Reclams Universal-Bibliothek 版 (2012) を参考に、H. M. Waidson の英訳 *Wilhelm Meister: Johann Wolfgang von Goethe* (Alma Classics 2013) を参照し、邦訳は山崎章甫訳『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』3巻 (岩波2007-09年) を用い『修業時代』と略記する。『修業時代』の続編に当たる『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』 (*Wilhelm Meisters Wanderjahre*) は、WMW 又は *Wanderjahre* と略記する。邦訳は同じく山崎章甫訳『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』3巻 (岩波2002年) を用い、『遍歴時代』と略記する。

方法

1966年、ポスト構造主義者ジュリア・クリステヴァが主張した間テキスト性 (intertextuality) の概念はソシュールの構造主義的記号論とバフチンの対話主義を統合する試みとされているが、理論の基となっているテキスト間の類似に関する考察は、アリストテレスの『詩学』 (*Poetics*) に遡り、芸術におけるミメシスの概念とともに現代の芸術批評にも通底していると考えられる。シェイクスピアはもちろんのこと、その概念は現代でも踏襲され、20世紀以降の小説の流れを抜本的に変えたと言われているジェームズ・ジョイス (James Joyce 1882-1941) の作品に関しては、その概念なくして『ユリシーズ』 (*Ulysses* 1922) の誕生はなかったであろう。

シルビア・ビーチ (Sylvia Beach 1887-1962) によってパリで刊行され、英米で焚書や発禁処分にもなった小説 *Ulysses* を連載したアメリカの前衛的批評誌『リトル・レビュー』 (*The Little*

Review 1914) 以来、ジョイスの作品は、哲学・心理学的アプローチ、間テクスト性、語りによる作者の不在、作者と読者の双方向的・対話的行為など、その批評は多岐に及んでいる。

他方、クリステヴァの理論の基になったソシュールの構造主義的言語論が発表された同じ頃、ロンドンのジョン・マレイ社 (John Murry) から刊行された『東洋の理想』 (*The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan* 1903) やニューヨークのセンチュリー社 (Century) から刊行された『日本の覚醒』 (*The Awakening of Japan* 1904) により、一躍、欧米でメディアの寵児となった岡倉が、1906年、ニューヨークのフォックス・ダフィールド社 (Fox & Duffield) から上梓したのが *The Book of Tea* であった。だが、日露戦争の直後という時代背景と、日本文化の特殊性もあり、英語で書かれていたにもかかわらず、同書の構造や比喩、語り・描写などの修辞技法を含む文学性についてはこれまでほとんど議論されていない。そこで本稿では、始めに同書出版の背景に触れ、次に同書にゲーテの引喩を発見する契機となった *Ulysses* に言及し、最後にゲーテの作品と類似する具体例を幾つか抽出し、その意義を考察したい。

The Book of Teaの意義

現在の東京藝術大学の前身である東京美術学校の草創期において、校長兼教授の任にあった岡倉覚三は、恩師の哲学者アーネスト・フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa 1853-1908) と共に、東西文化を融合する手法によって日本の伝統芸術を刷新し、近代日本美術を確立した。美校では、日本の伝統をふまえて新機軸を打ち出す岡倉の方針と、岡倉と対立する西洋画派との軋轢や私的事情などが絡み、やがて非職に追い込まれる。だが、そうした苦境にもめげず、連袂辞職した弟子達と間、髪を容れず日本美術院を創立した岡倉は、理論家というより実践家であった。その慧眼は日本政府の極端な西洋化を危惧し、100年先を見越して日本の伝統を衰退から救い、現代まで続く教育・文化行政の基を造った。*The Book of Tea* は岡倉の著書の中でも最も多くの言語に翻訳され、今日まで版を重ねているが、同書は1904年からボストン美術館の東洋部の顧問として、半年毎に日本とボストンを往復していた頃に書かれたものである。出版年の1906年には、太平洋に面した茨城県五浦海岸の絶景の地に日本のバルビゾンを見、日本美術院の絵画部門を移転し、財政逼迫にも拘らず、門下の逸材らと共に新たな芸術の創造を目指し、遠大な理想を追求していた。

The Book of Tea に一貫する思想は、欧米の帝国主義に追随していた明治政府から受けた内命により、当時、欧米で席卷していた黄禍論を鎮静化するために英語で論文を書くという国の威信をかけた高踏な平和主義であった。斉藤も指摘するよう、こうした背景には、1904年の日露戦争開戦の当日、末松謙澄を英国へ、岡倉を米国へ派遣した政府の外交戦略があった (『全集』別巻、148-49頁)。岡倉は文民として、武器ではなくペンによって世界の舞台で闘う気概を持し、芸術の発展と新たな生の可能性を示すべく、植民地獲得のために競い合う東西に融和

を求めたのである。そのため同書は「茶」という日常的テーマを論じながらも、社会・自然・宗教を包摂する広い視野から日本文化の芸術性を論じている。しかも、日本文化の特殊性を表象するため、文化論に韻文的要素を加えて劇化することでミサの二部構造をも暗示した異文化横断的な、キリスト教徒から見れば冒瀆的ともとれる文体実験を試みた、実践的文学でもある (Togo 2022)。それというのも、西洋の修辞法を援用し、僅少の語彙に無限なまでの意味を凝縮し、古今東西の引喩を組み合わせた比喩を「インドラの網」¹⁾のように張り巡らせ、生活・時流・自然、東西の宗教を一網打尽に語る暗示的手法によって、新たな創造の形を示し、常に成長と発展を続け、多種多様な解釈を可能にするテキストの仕組みを創ったからである。

Ulysses 第9挿話の「発見の入り口」から

では、次に、一見無関係に思える *The Book of Tea* (以降BTと略記する) と *Ulysses* (以降Uと略記する) との関係、*Ulysses* 第9挿話冒頭における奇妙な劇的描写から開示してみたい。

同挿話では芸術家スティーヴン (Stephen Dedalus) のハムレット論 (*Hamlet* 論) が展開するが、冒頭に図書館長を揶揄するような奇妙な描写がある。談話室で館長が靴音を響かせて、おどけたステップを踏む描写である。それは一体、なぜだろうか。そのような疑問を持って読むと、BTの不可視の存在が可視化され、BT第七章とU第9挿話との関係が、*Hamlet* 論やBTとに関連する哲学や密教的概念によって、神智学の議論を通して暗示されているのがわかる。つまり、同挿話が、BTと共通するキー・ワードによってBT第七章を暗示し、ゲーテの作品を介して、作中のシェイクスピア談義へ展開した可能性が高いからである。その鍵は次の表現に暗示されている：

Portals of discovery opened to let in the quaker librarian….(U 9.230-31)

Why did he come? Courtesy or *inward light*?(U 9.332)

The burden of proof is with you not with me ….(U 9.671) (強調は加筆)

「発見の入り口」を開けるため図書館長が入室する理由は「礼儀なのか、内なる光のためなのか」と問い、読者に「証明」を求めているのである。館長が「品よく座を取り持とうと猫なで声を出し」、「牛革靴をきしらせ、五拍子踊りで一步前に出」、「しかつめらしげな床の上を五拍子踊りで一步さがり」、「小走り踊りに向うへ行った」(U 9.5-6)²⁾ という奇妙な表現には、後述するように明らかに根拠がある。それは、ジョイスが、BT第七章の「始め」と「終り」を合体させ、切腹した茶匠が禅僧らしい颯爽とした覚悟で未知の世界に踏み出す様子を「軽快なステップ」に脚色したからである。すなわち、ジョイスは、BT第七章の冒頭と結末の描写を繋ぎ、館長のステップという演出効果によってそれをパロディ化したのである。館長の奇異な所作は、BT第七章冒頭で論じられている、審美主義の禅によって茶室で日常生活を律した

茶人の心得と、結末に脚色された茶匠の死への出立を描いた岡倉の描写をジョイスが前景化し、戯画化したのである。紙幅の都合で詳細は割愛するが、BT第七章冒頭の仏教理念と禪の審美学はアリストテレスの『ニコマコス倫理学』と重なる：

宗教では「未来」は我々の背後にあり、芸術では「現在」が永遠である。茶の宗匠は、真の芸術鑑賞は、芸術を生きた感化として捉える人へのみに可能になると考えていた。そのため彼らは茶室で行われる高度に洗練された尺度で、日常生活を律しようと努めた。いかなる場合も心の平静さを保ち、会話は周囲の調和を損なうことのないようにせねばならない。着物の種類や色、身のこなし、歩き方、これらすべてが芸術的人格の表現になりえた。これは軽んじてはならない事柄であった。それというのも、人は己を美しくして、はじめ、美へ近づく権利が得られるからである。こうして茶の宗匠は、単なる芸術家以上のもの、つまり芸術そのものになろうと努めた。それは、審美主義の禪であった。「完全さ」はそれを認めようとさえすれば、いたるところに存在する。こうしたことから利休は好んで次の古歌を引用したものであった。[花をのみ 待ちわぶ人に 見せたばや 雪積む丘に 萌え出でむと 草芽の中で待つ 春のさかりを] (BT VII. 1、強調は加筆、以下同様)

ここで岡倉は、藤原家隆(1175-77)の歌「春をのみ待つらむ人に山里の雪間の草の春を見せばや」を翻訳してアリストテレスの哲学的概念「可能態」の比喩を重ねていたのである。ジョイスは岡倉が、『ニコマコス倫理学』1098a.bを並行させている比喩的表現に気づき、それを第9挿話の冒頭で脚色し、館長に「高度に洗練された」様子で“Urbane”、「周囲の調和を保つため」猫なで声で話しをさせ“purred”、「芸術的人格を表現するため」踊りのステップ“sinkapace”と“coranto”(U 9.1-12)を踏ませたのである。つまり、芸術に対する茶人の心得を「ひねり」、権威を揶揄するシェイクスピアの2作品を暗示する踊りのステップでパロディ化し、館長に演じさせたのだ。その後、ゲーテの専門家である館長は、『修業時代』(Lehrjahre)で語られたヴィルヘルムのHamlet論を模し、ステイーヴンにその議論の口火を切らせるのだが、ウィリアム・シュッテ(William Schutte)によるとこの場面における館長の役割は華々しいものではなく、ステイーヴンはゲーテ研究の権威たる彼の発言を快く思わなかったとしている(33)。では、なぜそのような館長の発言を冒頭に置いたのだろうか。

その理由も、次の引用で明らかになる：

“Or to take arms against a sea of troubles,....” (Ham 3.1.59)

...this tumultuous sea of foolish troubles which we call life(BT VII. 4)

...taking arms against a sea of troubles, torn by conflicting doubts, as one sees in real life.
(U 9.3.4)

“a sea of troubles”は館長が*Hamlet*から引用した表現だが、*BT*にも上記のような類似表現がある。だが、*U*の“as one sees in real life”は*BT*の表現の書き換えであり、『*修業時代*』で*Hamlet*論が展開されている長い文脈を岡倉が最小限に圧縮し、それをジョイスが館長の言葉として再度書き換え、「二重の翻訳」をしたと考えられるのである。つまり、岡倉がゲーテの長い語りを圧縮して*BT*に書き換え、その*BT*の表現をジョイスが再度書き換え、*U*で援用したことを上述の文は示しているだろう。

ジョイスは、*BT*にゲーテの作品の引喩が埋め込まれている事実には気づき、ゲーテの専門家である館長を登場させ、*Hamlet*論を切り出す前に、冒頭で彼の言葉を糸口にして表現を異化し、前景化することで、読者に注意を喚起したのである。すなわち、*BT*第七章の冒頭で表白された芸術鑑賞の奥義と、巻末の茶匠の死への旅立ちの比喩を合体させ、館長の軽快なステップに脚色して、権威を揶揄するシェイクスピアの作品に暗示された踊りのステップという演出によって、第9挿話の幕を開けたのである。ジョイスは、哲学を劇化した岡倉の奇抜な創意を自らの作品に再現し、岡倉が実践した新たな創造への入り口を読者にも発見させるため、館長の踏む奇妙なステップで可視化したといえる。すなわち、ゲーテの専門家である館長の軽快なステップに前景化されたスティーヴンの*Hamlet*論は、岡倉がゲーテを内在化し、実践哲学『ニコマコス倫理学』を重ねている比喩に気付いたジョイスが、比喩が凝縮された第七章の「始め」と「終わり」の部分繋いでユーモラスにひねり、岡倉の作品を通して自らもその奥義に目覚め、継承したことを示す演出であったといえるのではないだろうか。

つまり、第9挿話冒頭の館長のステップは、岡倉が*BT*第七章冒頭で日本文化論に取り込み、援用したアリストテレスの実践哲学と巻末で脚色した『詩学』の悲劇理論に、新たな生のためには死も肯定するプラトン哲学を含意させた創意を、ジョイスが更なる創意で一体化した演出であったといえるのである。では、次にそのような入り組んだ比喩の仕組みを埋め込んでいる*BT*と、ゲーテの作品との類似を比較してみたい。

*The Book of Tea*とゲーテとの類似

- (1) 「チャールズ・ラムの美德と口うるさい岡倉」vs「ドイツ人の美德と口うるさい性格」

*BT*第I章に下記のような表現がある。敬虔なキリスト教徒であったチャールズ・ラムの性格を「マタイ福音書」（以降「マタイ伝」と略記する）の教義に重ねている文脈である：

チャールズ・ラムの「自分が知っている無上の喜びは、ひそかに善行をおこない、偶然にそれが顕れることだ」という言葉には茶道の真髄が鳴り響いていた。（*BT* I. 15）

このくだりに似た『*修業時代*』の文脈は、ドイツ人の美德と「口うるさい小言屋」という性

格が描かれている次の箇所である：

良いことは人目に立つようには行わないというのがドイツ人の気質だが、ドイツ人は正しいことを優雅に上品に行うやり方もあるということをあまり考えず、つむじ曲がりの精神にかられて、ともすれば、きわめて好ましい美徳を、口うるさい小言屋という真反対の形で表現する誤りに陥る。(WML 第2巻第7章)

岡倉は『修業時代』に記されたドイツ人が陥りやすい、美徳とは真反対の性格を自ら演じ、次のように主張した：

私は、あまりに齒に衣着せぬもの言いをすることによって、きっと茶道についての自分の無知を曝け出してしまおうと思う。それというのも、茶道の典雅な心が必要とするのは、人の期待に応えるだけのことを言い、余計なことは言わないことだからである。だが、私は典雅な茶人のつもりはない。(BT I.9)

ゲーテは正しいことを秘かに行う優雅な美徳を、ドイツ人の気質として描き、その弊害として口うるさくなると述べた。岡倉は、チャールズ・ラムの言葉を引用して寡黙の美徳とは対照的な、口うるさい弊害に陥りがちなドイツ人の気質を、彼自身の気質に重ねたのである。茶道で尊重されるのが寡黙であることを承知しながら、齒に衣着せずに茶道を論じるのは邪道である。つまり、岡倉は茶道でタブー視されている饒舌な自己を弁明し、『修業時代』を暗示する箇所を第I章の「人間性の器」(The Cup of Humanity)の文脈の中に埋め込み、「逆説的」に脚色したのである。

続く第II章「茶の流派」(The Schools of Tea)で岡倉は、芸術品としての茶にはそれなりの飲み方があると説き、宋の詩人李竹嬾(りちくらん)を引用し、銘茶も扱い方によっては台なしになることを敷衍して、誤った教育が青年を損なうと述べ、東西の考え方の類似を仄めかしている。東西の考え方が類似しているという岡倉の比較文化的視点は、東京美術学校での泰西美術史の講義でも一貫していた。これは1827年のゲーテとその友人エッカーマン(Eckermann 1792-1854)との談話を想わせるかのようになり、世界文学の到来を予期したゲーテに傾倒していた岡倉が、欧州旅行の車中で*Faust*を読了したほどゲーテに心酔していたことから裏付けられるであろう。日本文化を西洋の文物と相対的に論ずることによって、普遍的な人間性に訴えようとする表れだと解釈できるが、東洋文明と西洋文明の類似についてはすでに*The Awakening of Japan*において論じられていた(250-51)。

(2) 「青年期における教育の重要性」 vs 「少年時の教育」

宋の詩人李竹嬾は、この世にきわめて悲しむべきことが三つあると歎いている。誤った教育によって好ましい青年をそこなうこと、俗悪な賞賛によって名画を台なしにすること、焙り方の手際が悪いために銘茶をまったく浪費してしまうことである。

(BT II. 1)

第II章で中国の詩人を引用して茶を名画にたとえ、扱い方が悪いと名品も台なしになるとして茶を芸術作品と見做し、時代と流派を分類している。茶の歴史の変遷を芸術史に譬えているのだが、深層構造で「マタイ伝」を重ねてキリストの系譜と誕生を暗示し、茶の起源から審美主義の宗教へ神格化された「茶」を擬人化し、「変化」する主体として比喩的に論じている。

『修業時代』は、世間の荒波にもまれて成長する一人の青年の人生観や女性観、芸術観を描いた教養小説(Bildungsroman)である。同書は、日本の近代化のために、19世紀後半から20世紀初頭にかけて輸入された外国文学に入っている。そうした外国文学の輸入によって、ホメロス、シェイクスピア、ゲーテなどの古典的文学がBTで日本文化の特性を普遍化するために引用されている時代背景が窺われる。岡倉は同書出版の前後に、未刊行だが、能や歌舞伎の演目から素材を採った『小敦盛』(Ko-Atsumori)や『ヨシツネ物語』(The Legend of Yoshitsune)、『安宅』(Akaka)を著していた。絶筆となったオペラの台本『白狐』(White Fox)は、イザベラ・ガードナー(Isabela Stewart Gardner 1840-1924)に献呈され、彼女の協力を得て上演する予定であったが、計画は頓挫した。BT出版を挟んだ時期に日本の伝説や民話に由来する作品を執筆した背景には、日本人の汎神論や「輪廻転生」などの仏教的概念がギリシアやインド、中国の古代思想にも共有されていると認識していたからであろう。おそらく、岡倉は、こうした作品も西洋人の共感を呼ぶであろうと予想していたに違いない。

ゲーテは、『修業時代』に続く『遍歴時代』(Wanderjahre)において、人間にとって最も重要でありながら、生まれながらに与えられていないため、少年たちに教えなければならないものがあり、それは「畏敬」だとした(WMW 第2巻第2章)。同書によると、畏敬は「人間の本性にあたえられなければならない一段と高度な意識」であり、次の三つの宗教を通して自己自身に対する畏敬が生じるという。三つとは ① 種族的で全ての民族の宗教 ② より高いものを自分のところまで引き下げ、より低いものを自分のところまで引き上げる哲学的宗教、そして ③ 人類が到達しなければならなかった究極のキリスト教、だという。『遍歴時代』ではこの三つの宗教が一つになって初めて真の宗教をもたらし、最高の畏敬、すなわち自己自身にたいする畏敬が生じるのだとする。そして、これら三つの三位の神格が最高の一体だとされ、キリスト教の「三位一体」の概念と、あらゆる民族の運命に共通する「回帰」の概念に言及している。教育州では、子供たちの三様の身振りで畏敬の対象や意味を示し、画廊の絵画を見て回ることで抽象概念を「奇跡」と「比喩」によって理解させている。岡倉がBTにおいて仏教やキ

リスト教などの宗教的概念を通じて「茶」を論じ、“teism”という既存の英語に「審美主義の哲学」を意味する新造語「茶主義」“Teaism”を加え、ソクラテスやアリストテレス、プラトンの哲学的概念を含意させたのも、おそらくゲーテが言及した人間形成上の大事な要素としての畏敬を念頭においたからではないだろうか。岡倉は、最高の畏敬に至るためには、宗教が重要な位置を占めるとするゲーテの考えに賛同していたからに違いない。すなわち、岡倉が“Teaism”に「禅」と「道教」を合体させて論じたのは、ゲーテの言う三位一体の神格に連なる「畏敬」に至る道としての、三位一体の概念を表象するため、「茶」と「禅」は一味であるという茶道の「茶(ちゃ) 禅(ぜん) 一味(いちみ)」の理念に、審美的で科学的な「道教」を加えた「三教一致」の思想を日本文化論の文脈に重ねて読み換えた可能性が高いといえよう。

(3) 「オランダ人主婦」vs 「オランダ人の清潔好き」

BT第四章「茶室」(The Tea Rooms)では、茶室は、第一に「清潔であること」が求められていると述べている。しかも、それは人為的な清潔さではなく、自然の姿が投影された清潔さと美しさでなければならないので、『修業時代』で語られた「オランダ人の清潔好き」は、BTでは逆説的に採り入れられていた：

部屋のいちばん暗い隅に塵ひとつ見あたらない。もしあるようなら、その亭主は茶人ではない。… 金属の骨董品は、オランダの主婦のようにむやみやたらにはたいてはならない。花瓶からしたたる水は拭きとらなくともよい。それは露を想わせ、涼味を覚えさせるから。
(BT IV.9)

「世間では、オランダ婦人の清潔好きを笑い物にしますけれど、わたしのお友達のテレゼも、あの人の家政のなかで、同じような考えがいつも目の前になかったら、いまのテレゼはなかったでしょう」(WML 第8巻第3章)

『修業時代』では「清潔好き」が世間の物笑いとなっていることにも頓着なく、自己の信じることを実践してきた愚直さに価値を置き、それがテレゼの人間形成の糧となってきたと述べている。オランダ人がきれい好きであったかは措くとして、BTの引用が『修業時代』の表現を逆手にとった表現であるとすれば、文学や聖典の「逆説的引用」という岡倉の得意技を示す例ともなる。この「ひねり」を効かせた引用の工夫は、Uでも、多くのパロディやユーモアを生み出す原動力となり、U以前の作品とは一線を画す手法となっている。ジョイスの琴線に触れたに違いない「ひねり」を効かせた岡倉の「逆説的引用」方法は、言葉の機微に通じたユーモアの持ち主である岡倉の、得意技でもあった。

(4) 「美術鑑賞の秘訣」 vs 「茶道の宗匠に関する挿話」

- ヴィルヘルム：「私があひの絵にひかれたのは、画題であって技術ではありませんでした」
- 見知らぬ人：「お祖父さんの考えはちがっていたようですね。コレクションの大部分は、画題がなんであれ、巨匠の腕を称賛せずにいられないような素晴らしいものばかりでした。(後略)」
- ヴィルヘルム：「あなたのご批評はごもっともと思いますが、いま私があひの絵の前に立っても、あひの印象は変わらないだろうと思います。(後略)」
- 見知らぬ人：「言うまでもなくそういう感情は、一般に美術愛好家が偉大な巨匠の作品を鑑賞する時の見方とは非常にかけ離れたものです。あひのコレクションがあひのままお宅にあったならば、作品そのものを見るあひの目もしいに開かれて、いつまでも芸術作品のうちに、自分自身や自分の好みだけを見なくなったでしょうがね」(WML 第1巻第17章)(話し手は加筆、以下同様)
- 弟子：「どの品も見事なもので感嘆のほかありません。これをみていると、先生が利休よりもすぐれた趣味をもっておられることがわかります。なにしろ、利休の収集品を鑑賞できるのは、千人中一人しかいないのですから。」それを聞いて、遠州は悲しげに答えた。「それは、私がいかにほんよう凡庸であるかを証明しているにすぎません。あひの偉大な利休は、自分のはだ膚に合う物だけを愛する勇気がありましたが、それにひきかえ私は、無意識のうちに多数の趣味に迎合しているのです。実に、利休は茶人としても千人に一人の人間でした。」(BT V.12)

『修業時代』では目利きの祖父が死亡した時、父が絵を売却したことを回想し、祖父の鑑識眼と収集について、ヴィルヘルムは絵の売買をした見知らぬ人と話をする。そして自分が一般的な美術愛好家とは違い、幼時から自分の好みに合う絵にこだわりを持ち続け、その気持ちは現在も変わらないと語る。

このヴィルヘルムの考えが、BT第V章「芸術鑑賞」に引用された目利きの茶人の話に類似している。岡倉は、江戸時代の茶匠で造園家、小堀遠州の好みを示し、ヴィルヘルムのように自分の好みにあったものだけを大切にすることが芸術家として茶人の好ましいあり方だと語る。一流の茶人は、評判や名声によって作品を判断するのではなく、自らの好みにあったものを是とするからであり、まさに、この点で、ヴィルヘルムと小堀遠州の芸術観とが一致するのである。岡倉は洋の東西を問わず、優れた芸術品に対する鑑識眼は、世間の名声に左右されるものではないと指摘し、巨匠、小堀遠州とヴィルヘルムの芸術観とを重ねたと考えられる。

さらに類似する内容が『修業時代』で反復され、世間に迎合するのは芸術家としての墮落であることが、異なる文脈で語られている：

侯爵： 「環境が芸術家にとって不利で、… 世間が軽い、気楽な、快適な外見だけを求めていることに気づくと、芸術家が、怠惰と利己心から、凡庸なものにしがみついたとしても驚くにはあたらないでしょう」(WML 第8巻第7章)

このくだりは、BTにおいて、洋の東西を問わず偉大な巨匠たちは観客に秘密を打ち明ける手段として暗示の価値を熟知しているのだから、果てしない思想の広がりには畏怖の念をおぼえるが、現代の凡作には冷ややかで儀礼的な挨拶しか感じられず、技術にのみ夢中になり、自己を超える努力をしない作品が多いことを嘆いた箇所(BT V.8)を想起させる。

(5) 「百合」の花のたとえ vs 茶室に飾った百合の花

「百合を見てごらん下さい。雄蕊と雌蕊が同じ茎に生えているではありませんか。二つを生んだ花が、二つをむすびつけているではありませんか。百合は無垢の象徴ではありませんか。」(WML 第8巻第9章)

いらいらするような暑い夏の日中、ひるさがりの茶室に入ると、薄暗くひんやりした床の間に百合がたった一輪、掛け花瓶に挿してあるのを発見するだろう。露にぬれて花は、人生の愚かしさに微笑んでいるように見える。(BT VI. 20)

『修業時代』で、侯爵の息子のアウグスティーンは、侯爵が晩年に設けたため里子に出された実の妹がスペラータであると知らずに彼女を愛し、結ばれ、子供を宿してしまった不幸な過ちを皆に納得させるため「無垢の象徴」として百合の花を引き合いに出して説得を試みる。百合の花は雄蕊と雌蕊が同じ茎に生えているので、自然に学べば「兄妹の結びつきが実をもたらす」として自然の果を主張している。近親相姦という禁断の愛から、生まれるべきではなかった子供の、生死をめぐって展開する、素性の知れない子供ミニヨンの話が、同書のプロットの底流にある。

一方、BTで、岡倉は、自然派に属する茶人は床の間に飾る花を選んだら花そのものに物語を語らせるため作為を加えない、と述べている。作為を加えず「自然にまかせる」という意味を考えると、『修業時代』で用いられた百合の花に関する叙述の意味に通底するだろう。本来、百合は香りが強いので、茶道では茶花として用いるのはタブーであるが、それを岡倉が承知していたか否かは不明である。だが、弟の由三郎と共に正阿弥という一流の茶道家に師事した覚三が知らなかったはずはなく、その禁花である百合を、敢えて茶花として床の間に飾るとい

表現の異化に挑んだからには、特別な意味があったはずである。『修業時代』の「百合の花」の文脈と関連して想起されるのは、岡倉が異母姪の八杉貞(1869-1915)との間に子供をもうけたという目を疑う事実である。百合の花の超然とした、清楚な姿とは裏腹に、その花に込めた岡倉の思いは、ゲーテの作品と関連させると首肯できるものでもあり、多様に解釈されるものでもあるだろう。というのも、キリスト教では、百合は聖母マリアの象徴であり、神意によって受胎した純真無垢の象徴であるからだが、両義的に用いられる百合の花を、敢えて茶花として描いたのは、この語が含意する多義性を岡倉が十分承知していたからかもしれない。イマヌエル・カントに関する限り、百合はレジスタンスの象徴という読みも可能だからである。だが、結局のところ、最終的な解釈は読者に委ねられているのかもしれない。

ゲーテ引用の意義

岡倉の活動は文壇にまで及び、「文学局外観」と題する講演では、幸田露伴、森鷗外、尾崎紅葉らの作品について内容に踏み込んだ提言を行っていた。それによると、作品の根本思想がもっと深大ならゲーテの『ウェルテルの悩み』のような存在となったであろうが、個人の感情レベルに留まり、現代社会を反映していないと批判した。そして、時流を表白し、社会の肺腑に入るためには、功利主義的な視点(utilitarianism)を持ち、社会を動かすような気持ちになることを勧め、ゾラ、トルストイ、ディッケンズ、サッカーを挙げ、彼らの理想主義者(idealist)的な姿勢を強調した。さらに、日本作家にはユーモアや、スコットのようなシヴァリー(chivalry)の思想を描いたものがないと指摘し、外国の標準的な作品(standard work)を翻訳する必要性を強調した(岡倉『全集』第3巻、224-26頁)。この講演からも、世界文学の到来を予期していたゲーテを高く評価し、世界の潮流を見据えていた岡倉の文芸批評家としての鋭い眼差しが窺われる。

また、遺稿として発表された「藝術界の過去現在」と題する講義筆記には上記の作家群のほか、一遍の小説で社会問題を解決しようとしているヨーロッパの作品例として、シェイクスピアやヴォルテール、イプセンを加え、ゲーテの作品に再度言及していた。その講演によると、ゲーテの『ファウスト』(*Faust* 1808-32)は個想と普通主義の衝突を表現するところに止まったが、それをトルストイやイプセンが継承しているとして、日本の文藝家は今後、精神と形式の融和を計り、これらの外国文学のように社会の大問題を攻究するようにと訴えた(岡倉『全集』第3巻、271-76頁)。岡倉が病没した1913年には、森鷗外が『ファウスト』を完訳したという事実から推察されるように、岡倉の影響は明治の文豪をも動かす強い影響力があったことが窺われる。

おそらく岡倉は、ゲーテの巧みな表現はもちろん、宗教観にも深く共鳴していたに違いない。BTに『修業時代』や『遍歴時代』の引喩が見られるのは、ゲーテの優れた見識や洞察力に共鳴し、自らの作品に同様の思想を反映させたいと願う意図の表れだといえる。むろん、日

本文化論の文脈で、いかにゲーテの引喩を重ねるかの工夫は困難を極めたに違いない。だが、ゲーテ自らも述べていたように、東洋人も西洋人と似た考えをもっているという考えに反映されているように、岡倉は隠喩や比喩を通して、世界が共有する根本的な人間性に訴えようとしたのだろう。人類が共有しているその根本的な人間性を日本文化論の中で一体化させた言葉の技 (art) こそが、*BT* の真骨頂であり、ひいてはジョイスをして、第9挿話でゲーテの専門家の演ずる奇異なステップの描写で *BT* の存在を可視化させるという超絶技巧を考案せしめたエピファニーの源泉であったのかもしれない。

また、岡倉は美術や文学のみならず政治に関しても、世界史の観点から高い見識を備えていた。欧米においてキリスト教が政治や社会に及ぼした影響を分析した上で、日本の宗教問題についても建議していたことが「宗教行政ニ関スル私見」(1896年)に窺われる。宗教は社会の育成に関与し、公共の安寧に関係するので、国は宗教に対してしっかりした政策を持つべきで、文明開化の下では、個人の信教の自由が保障されるべきだとした。『遍歴時代』では人の成長に影響する宗教の意義が三位一体として語られているが、仏教に帰依していた岡倉はゲーテの宗教観に共鳴していたかもしれない。

岡倉は、ヨーロッパの歴史や社会を見据えたうえで、日本では、仏教が欽明天皇以来信奉され、政治や文化、工芸美術品にも関係し、文学や美術にも仏教の理想が貫かれているので、識者は、仏教の盛衰を注視すべきだと考えていた。そして、神仏分離令以来、仏教が焚書の害を被り、宗教が乱れているが、それは国の恥辱であるとして、全国の古社寺や宝物を保存する責任を、国に求めた。また、キリスト教も十分な保護をえられていないと訴え、宗教行政に関する私見に具体化されていたように、岡倉は『遍歴時代』の教育州での宗教についての語りの中に、自らの信条と共振するものを感得していたに違いない。

まとめ

先述の通り、老境に入ったゲーテが1827年1月、中国の小説を読んで友人のエッカーマンに語ったように、中国の小説は表現が明快で慎み深い点を除けば、登場人物の感情や行動は洋の東西を問わず似ており「詩は全人類共通で(中略)国民文学はもはや価値あるものではなく、世界文学の時代が到来している」と認識していた(Domínguez 56, Goethe 327-29)。岡倉もまた、美校での「泰西美術史」の講義で、比較文化の観点から、共通する文化や宗教の普遍性を指摘していた。*BT* では、日本文化の典型として「茶」という主題を選び、その「茶」が西洋にも受け入れられている事実を切り口に、一国の些末事にも万国共通の普遍性があることを説いた。その普遍性を暗示で示したのが、古今東西の引喩を用いた、同書の比喩的技法であった。西洋の古典から引き継がれた伝統的修辞技法を用いた背景には、日本という極東の国にも通底するヨーロッパの哲学や価値観を表象しようとした岡倉の意図が看取できる。

明治期に日本に紹介された『修業時代』は、19～20世紀の世界の芸術家や文学者にとって

も古典的愛読書であっただろう。ジョイスにとっても、彼を取り巻く人間関係や、文学的環境に、*BT*の中にゲーテの引喩を発見する契機を与えてくれた人がいた可能性がある。それがゲーテの専門家でアイルランド国立図書館の館長トマス・リスター(Thomas William Lyster 1855-1922)であったのだろう。館長の唐突な会話内容と談話室での軽快なステップによって、*U*第9挿話は始まるが、ゲーテの専門家である館長がその発見の喜びを身体で表現して、小躍りしながら入ってくる描写は、*BT*第七章の「始め」と「終り」の表現を一体化させて劇化する劇的演出であった。つまり、芸術作品*U*第9挿話の比喩的表現は、別の芸術作品*BT*第七章の芸術批評であることを暗示し、談話室での会話が*BT*に内在化されているゲーテの引喩に導く「発見の入り口」の鍵となって、ドアを開けてくれたのである。

外国の文物の要素を採り入れながら独自の芸術を創造してきた日本の芸術の伝統が *The Ideals of the East* で論じられているが、その散文的叙述を文学化し、言語による芸術作品に昇華させたのが *BT* である。

他方、岡倉はゲーテを高く評価していた。そのため、*BT*にゲーテの作品の引喩を織り込んだのは、時の流れと共に「変化」してゆく芸術や文化の様態を“Teaism”という抽象概念によって、日本文化と並行させて普遍的作品として再現したいと考えたからに相違ない。本稿70-71頁で先述した前衛的批評誌『リトル・レヴェー』の創刊者、編集長のマーガレット・アンダーソン(Margaret Anderson 1886-1973)や、編集者エズラ・パウンド(Ezra Pound 1885-1972)の主張のように「芸術作品は新たな作品を創ることでその作品を批評している」³⁾からである。

換言すれば、ドイツ古典派主義を確立したゲーテは、その作品を通して*BT*の中で再創造され、岡倉によって東西を融合する作品として、21世紀の世界文学に架橋する新たな生命を吹き込まれたことになるだろう。

【注】

1) 岡倉は、日本の芸術は「インドラの宝石の網」のように常に成長するものであり、国民文化の最高峰の表現であるとし、それを理解するためには、儒学や、仏教諸派の思想、政治の循環、英雄的人物、大衆の喜怒哀楽なども批評に入れなければならないと主張した。“The Range of Ideals” in *The Ideals of the East. Okakura Kazuo collected English writings*, no. 1, pp. 16-17.

2) Giffordによると、この描写はShakespeareの2作を暗示する。“sinkapace”と「小走り踊り」“coranto”は*Twelfth Night*(I.iii.136-39)で、子爵トビーのユーモラスな会話。「牛革靴」“neatsleather”は*Julius Caesar*(Ii.26-29)における靴職人の自慢話の暗示とされる(193)。

*BT*にも“neatsleather”という表現があり、陸羽の『茶経』を引用し、良質な茶を「タタール人の騎手の革靴のような皺、屈強な去勢牛の喉袋のようなうねり」と表現している：“creases like the leathern boot of Tartar horse-men, curl like the dewlap of a mighty bullock,…”(II. 6)。*BT*ではシェイクスピア作品が普通名詞化され、隠喩で用いられている。普通名詞化の例は“much ado about nothing”や“a tempest in a tea-cup!”(I.4)などがある。隠喩の例としては、第VI章でOthelloから薄幸なデズデモーナと「花」の運命を重ね、次章における悲劇の必然性を描くために『詩学』の手法が応用されている(東郷2014年;2015年)。

- 3) すでに同様の芸術批評を、岡倉は「藝術ハ藝術ニ抛りて解釈セラルモノナリ(以下略)」と「泰東工藝史講義メモ」(368)に記していた。おそらくアリストテレスの援用と考えられる。

【引用・参考文献】

- Aristotle. *Aristotle's Poetics*. Trans. by S. H. Butcher, New York: Hill and Wang, 1961.
- . *Aristotle: The Art of Rhetoric*. Trans. by H. C. Lawson-Tancred, 1991, London: Penguin, 2004.
- . 『ニコマコス倫理学』(上) 高田三郎訳, 岩波書店, 1971, 1978.
- . 『ニコマコス倫理学』(下) 高田三郎訳, 岩波書店, 1973, 1977.
- Anderson, Margaret. "Announcement." *The Little Review*, Mar., 1914, Chicago: The Little Review Fine Arts Build, 1914, pp. 1-2.
- Auerbach, Erich. *Mimesis: The Representation of Reality in Western Literature*. Trans. by Willard R. Trask, Princeton & Oxford: Princeton UP, 1953, 2013.
- Benjamin, Walter. *Illuminations*. London: Bodley Head, 1955, 2015.
- Domínguez, César. Haun Saussy and Dario Villanueva. *Introducing Comparative Literature: New Trends and Applications*. New York: Routledge, 2015.
- Gifford, Don. *Ulysses Annotated: Notes for James Joyce's Ulysses*. U of California P, 1974, 1989, pp. 192-93.
- Goethe, Johann Wolfgang von. *Wilhelm Meisters Lehrjahre*. Herausgegeben von Ehrhard Bahr. Stuttgart: Reclam, 1982, 2012. 『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』3巻, 山崎章甫訳, 東京: 岩波書店, 2000, 2002, 2009. (上) 106-08, 170頁. (下) 177, 271, 291頁.
- . *Wilhelm Meisters Wanderjahre oder Die Entsagenden*. Herausgegeben von Ehrhard Bahr. Stuttgart: Reclam, 1982, 2020, 2021. 『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』3巻, 山崎章甫訳, 東京: 岩波書店, 2002, (中) 16-22頁.
- . *Wilhelm Meister: Johann Wolfgang von Goethe*. Trans. by H. M. Waidson, London: Alma Classics, 1977-82, 2011, 2013.
- . *Goethe Gespräche mit J. P. Eckermann*. Ed. Johann Peter Eckermann, Leipzig: Insel, 1908.
- Joyce, James. *Ulysses: A Critical and Synoptic Edition*. Eds. by H. W. Gabler, et al., New York & London: Garland, 1986.
- クリステヴァ, ジュリア. 『テキストとしての小説』. 谷口勇訳, 国文社, 1985.
- Okakura, Kakuzo. *The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan*. In *Okakura Kakuzo collected English writings*, vol.1, ed. Sunao Nakamura, Heibonsha, 1984, pp. 3-132.
- . *The Awakening of Japan*. In *Okakura Kakuzo collected English writings*, vol.1, ed. Sunao Nakamura, Heibonsha, 1984, pp. 169-264.
- . *The Book of Tea*. New York: Fox Duffield, 1906.
- . *Ataka*. 草稿. 岡倉天心五浦記念美術館, 1904.
- . *Ko Atumori*. 草稿. 岡倉天心五浦記念美術館, 1904.
- . *White Fox*. 草稿. 岡倉天心五浦記念美術館, 1913.
- . [岡倉天心]. 「藝術界の過去現在」『岡倉天心全集』第3巻, 平凡社, 1979, 271-76頁.
- . [岡倉天心]. 「文学局外観」『岡倉天心全集』第3巻, 平凡社, 1979, 224-26頁.
- . [岡倉天心]. 「伊予丸船上にて」齊藤隆三記「岡倉氏演説大意」『岡倉天心全集』別巻, 平凡社, 1981, 148-89頁.
- . [岡倉天心]. 「泰東工藝史講義メモ」『岡倉天心全集』第4巻, 1980, 368頁.
- . [岡倉天心]. 『茶の本』桶谷秀昭訳, 東京: 講談社, 1994.

パウンド、エズラ。「ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』」吉野昌昭訳『ユリイカ』詩と批評. Vol. 9-11. 青土社, 1977, 70頁.

Schutte, William M. *Joyce and Shakespeare: A Study in the Meaning of Ulysses*. 1957, Yale UP, rep. Conn.: Archon B., 1971, pp. 34-36.

東郷登志子「『オセロー』と『茶書』第Ⅵ章の比較研究」『目白大学人文学研究』10号, 2014, 175-90頁.

———.「『茶書』と『ユリシーズ』をつなぐ『オセロー』: ジョイスが継承した岡倉のシェイクスピア的比喩と『詩学』の手法」『五浦論叢』22号, 茨城大学五浦美術研究所, 2015, 1-17頁.

———. [published as Togo, Toshiko]. “Creative Translation of the Mass in *The Book of Tea* (1906).” *Izura Bulletin*, no. 29, Izura Institute of Art and Culture Ibaraki U, 2022, pp. 1-23.

(2022年10月12日受理)